

登山の多様化について

About the diversification of a climbing mountain

1K04B132-9

高谷 和郎

指導教員

主査 宮内孝知先生

副査 友添秀則先生

1、研究の動機、目的、方法

本研究の動機は、過剰に登山が多様化していると感じるからである。登山として扱うものが多くて、山に行かない登山も誕生している。例えば、河原や海岸での「フリークライミング」などである。登山という言葉の概念が拡がりすぎて、曖昧なものとなった。筆者は、「登山とは、計画したときから始まり、山の頂上を目指し、安全に下りてくるという一連の流れ」であると考え

る。研究目的は、人と山のかかわりからどのように登山が変遷してきたかについて論じて、登山が多様化している現状を検証することである。そして、登山とはどのようなものかを考えていく。

本研究は文献及びインターネット上の資料による研究とする。

2、各章の要約

第1章では、本研究における「山」と「登山」の定義についてである。「山」は「人が登る対象としての山」と「信仰の対象としての山」という定義づけをする。また、「登山」は、登る理由は問わず、「山に登ること」とする。そして、目的別に登山を分類する。宗教的動機による「宗教的登山」、功利的目的による「職業的登山」、山に登ることそれ自体に楽しみと価値を見だし、積極的態度で登山を追求する「スポーツ的登山」、及び登山を人生哲学などの一部とする「静観的登山」に分けられる。

第2章では、人と山のかかわりを、「信仰」、「仕事」、「スポーツ」の3つで取り上げる。信仰としてのかかわりは、山を「入ってはいけない聖域」と考える山岳信仰の時代、「修行の場」と考える修験者による開山の時代、講中登山が盛んに行われていた時代と変遷していく。仕事としてのかかわりは、「山案内人」について取り上げる。彼らは、講中登山から近代登山までの時代を支えた。スポーツとしてのかかわりは、スポーツ登山の心といわれている「アルピニズム」について論じる。また、志賀重昂の『日本風景論』や日本アル

プスで本格的な近代登山をはじめたウォルター・ウェストンなどに影響されて誕生した「山岳会」による初登頂や初縦走などの探検的登山の時代から、学校山岳部の極地法登山の時代や社会人山岳会のアルパイン・スタイルによるスピードを追求する時代と移り変わり、現在の登山に至る。

第3章では、登山が多様化していると考えられるいくつかの例を考察する。まずは、登山方法の分類をする。道具や技術の変化により、登ることのできる山の季節や対象が広がり、登山方法が多様化した。つぎに、著しく変化しているクライミングについてリト・デハダ・フローレスの「クライマーがプレイするゲーム」をもとに検証する。フリークライミングとアルパインクライミングの分離により、フリークライミングは、その形式と内容が独立したものとなった。最後に、記録を目的とした登山について、百名山登山、階級付け(グレーディング)、競技登山を論じる。初登頂や初登攀などの記録の他、登った山の数、難しさやタイムといった数値記録に価値がおかれるようになった。

第4章では、登山の多様化についての結論及び今後の課題について述べる。現状は、道具や技術の進歩と登山者の価値観の変化により、登山が多様化した。ただ、「山に登ること」「山に行くこと」が登山であると考えられて、登山は普及したが、登山そのものの概念は曖昧となった。今後の課題は、自然環境への配慮と主体的な登山を心掛けることである。

第5章は全体のまとめをする。これから登山をする際には、登山者自身が、自分にとっての「登山とは何か」を考えることが重要であると結論づける。

〈主な参考文献〉

- ・ 齊藤一男著 『山の文化とともに』 アテネ書房 2004
- ・ ダグ・スコット著 『ビッグ・ウォール・クライミング』 岡本信義訳 山と溪谷社 1977